

Y15a 新聞にみる天文の表象

中村理（早稲田大学）

本調査は、天文学と社会の関わりを考察することを目的に、「天文」という言葉が新聞にどう使われているのかを、計量テキスト分析を用いて明らかにするものである。天文がメディアにどう表象されるかは、天文学の広報と普及に重要なテーマである。しかし、過去の天文学会年会では、実証的にメディアを検証する報告に乏しいのが現状だ。そこでこの調査では、その隙間を埋めることに挑む。新聞を対象とするのは次の3つの理由による。すなわち、新聞はマスなメディアで世相の反映が期待できること、長期にわたって均質な内容を提供していること、記事データベースがあること、である。

調査は、全国紙の中でも発行部数のもっとも多い読売新聞と朝日新聞を対象にした。そして、1985年から2015年までの記事のうち、「天文」という言葉を含むものをすべて抽出し、計量テキスト分析をおこなった。計量テキスト分析の基本の一つは、記事中の言葉を数えることである。たとえば、単純に数え上げればよく使われた言葉が分かる。その結果、それら記事中にみられる頻出語の上位には「科学」「望遠鏡」「研究」「観測」「教授」などがあげられた。ここからは、天文が研究的な側面から語られていることがうかがえる。また、同じ記事中に使われることが多い言葉同士は、関係が深いものと類推される。これをもとに、使われた言葉を機械的にクラスター分析にかけることができる。その結果、天文は、研究／研究者、教育、日食や彗星等の観測体験など、いくつかの文脈で語られたであろうことが量的に示された。発表では以上を含め、計量テキスト分析からうかがえる、新聞の天文の語り方を報告する。